

第7次調査までの総括

今回の第7次調査をもって昼飯大塚古墳の範囲確認調査をひとまず終了することとなった。昭和55年度にはじめて測量をおこない、周壕などにトレンチを設定した第1次調査から20年を経ている。当時墳丘長137mと報告され、岐阜県最大の前方後円墳との評価がなされた後はしばらくの空白があったが、整備構想に始まる平成5年度の再測量、平成6年度の第2次調査以後は毎年多くの成果を蓄積してきた。ここで長年の調査成果を要約しきれものではないが、今後刊行予定の正報告書までの橋渡しをしておきたい。

墳丘形態と規模の確定は国史跡とする上でも重要な調査課題であった。周辺の宅地化や墳丘の改変はトレンチ設定などに影響を及ぼしたが、物理探査やボーリング調査を併用した方法を駆使し、第6次調査までに墳丘長約150m、後円部径約96m、くびれ部幅約55m、前方部幅約82mという数値を得るにいたった。これから復元できる墳丘形態は大和北部に造営された古墳群のものと近似し、前方部3段、後円部3段という段築成からみても、昼飯大塚古墳が畿内特定勢力との密接な関係を背景に築造されたことが窺える。

後円部頂では比較的良好な状態で遺構や遺物を確認した。径約20mで配置された外周埴輪列は前方部にまで続くことを確認し、その内側には方形区画や方形壇はみいだせなかったが、家・鞆・盾・蓋・甲冑形などの形象埴輪の存在を推定できた。また、後円部頂の特定の範囲から集中して滑石製の玉、小型の土師器、笄形土器や土製品が出土し、葬送儀礼に関する多くの情報を収集することができた。

墓壇内の竪穴式石室と粘土槨はほぼ同時に構築されたと判断している。石室は盗掘を受けていたが、盗掘坑埋土から玉類、刀子・斧・埴形などの石製模造品や緑色凝灰岩製・滑石製の石釧などが出土し、副葬品の一端を把握することができた。墓壇内西部では刀剣と柄付斧などの農具からなる鉄製品群が、石室と粘土槨を被覆する程度まで墓壇が埋め戻された段階で、それらの主軸に直交する方向で配置されていた。これが第3の埋葬に伴うものか、あるいはほかの解釈をすべきものかは今後の調査課題である。

築造時期については、円筒埴輪や形象埴輪、滑石製玉類、土師器、石製模造品などの特徴をもって、周辺の古墳との比較では矢道長塚古墳よりも後、遊塚古墳よりは前と考えるのが妥当である。実年代におきかえると4世紀後葉としておきたいが、この時期に限れば昼飯大塚古墳は東海地方最大規模となる。被葬者の具像はみえないにしても、畿内特定勢力との連携のもと造墓と様々な儀礼を受容した勢力層は、不破を拠点とし4世紀代を通して濃尾平野の広い範囲にわたって政治的な覇権を握っていたものと考えられる。(中井)

報告書抄録

ふりがな	ひるいおつがこふん6 はんいかくになちようさがいよう へいせい11ねんど							
書名	昼飯大塚古墳 範囲確認調査概要		平成11年度					
シリーズ名	大垣市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	阪口英毅 中井正幸ほか							
編集機関	大垣市教育委員会							
所在地	〒503-0911 岐阜県大垣市室本町5-51 TEL.(0584)82-2300							
発行年月日	西暦2000年8月1日							
所収遺跡名	所在地	所在地		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひるいおつがこふん6 昼飯大塚古墳	岐阜県 大垣市 昼飯町 大字大塚	21202	48	35度 23分 03秒	136度 34分 30秒	1999年 8月2日 } 1999年 11月15日	500㎡	環境整備事業
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
昼飯大塚古墳	古墳	古墳時代	墓壇・石室・粘土槨・鉄製品群・埴輪列・墓石		埴輪・土器・鉄製品・石製品		3段築成 墳丘長約150m 同一墓壇に2種の埋葬施設	

大垣市文化財調査報告書 第37集

昼飯大塚古墳

範囲確認調査概要 平成11年度

2000年8月1日発行

編集・発行 大垣市教育委員会

印刷 榎谷印刷株式会社

〒503-0936

岐阜県大垣市内原2-177

TEL.0584-89-9511